

町ごとの役割についての考察

—— 儀式における『源氏物語』の六条院の入口 ——

加藤伸江

はじめに

『河海抄』^①に、「此六條院は河原院を模する歟別記〔真本御記二〕みえたり。延喜（十）七年三月十六日己丑此日參入六條院此院是故左大臣源融宅也大納言源朝臣奉進於院矣。一世源氏作られたるも其例相似たる歟」と注記されて以来、六条院は源融の河原院を模した邸だと言われている。『拾芥抄』^②に、「六條坊門南、万里小路東八町云云、融大臣家、後寛平法皇御所、本四町京極西、號東六條院」とあり、河原院は、京極大路の西にあったと記されている。このため、六条院もこの位置にあったと想定して図が作成されている。^③

川本重雄氏は、寝殿造邸宅の晴と藝について大炊御門東洞院殿移建の記述から、「移建前には東洞院大路に面した東面が晴であったために東面に対が建ち、西対代廊・寢殿・東対の配置であったものが、東洞院大路の東へ移建されると、西面が東洞院大路に面するこ

とになり、西晴の邸宅となった」と、大路に面した側が晴の邸宅になる旨指摘されている。^④川本氏の掲げられる該当記事を次に示す。

〔移建前〕

寢殿為南殿、東対為中殿、《昼御座南面》、西対代廊為皇后宮御所、『中右記』(天仁二年(一一〇八)十一月二十八日条)

〔移建後〕

於新造大炊殿披行御読経也、(中略)予着中殿南庇座、《西対也》、『中右記』(天永三年(一一二二)九月十九日条)

臨時祭、皇后宮昇給、東対東廂一間為御所、

『長秋記』(天永四年(一一二三)三月十九日条)

移建前は、東対が中殿に、西対代廊が皇后宮御所と見なされているが、移建後は、西対が中殿に、東対が皇后宮御所側にと、東西が変わっていることが分かる。これは、大路に面した側に重要な殿舎が配置されることを示すものである。

このような大路を意識した邸宅の構造が、『源氏物語』に描かれる六条院からも言えるであろうか。儀式における町ごとの役割から考察していきたい。

一、六条院における儀式について

六条院で行われた儀式を一覧表にまとめた。会場に使われた町と、主催者、入口となった町に注目して作成した。殿堂について明記されている場合、右に付した。備考には、儀式の内容などを記す。

春の町で行われた儀式のうち、源氏主催のものは八例である。初音巻「正月臨時客」「男踏歌のもてなし」、藤裏葉巻「明石姫君の入内」「冷泉帝の行幸」、若菜上巻「女三の宮降嫁」、若菜下巻の朱雀院御賀の練習である「女楽」、薫誕生の儀式になる柏木巻「薫の産養」「薫の五十日」である。春の町で行われた儀式で、源氏以外が主催する場合は四例である。若菜上巻の「源氏四十の賀」を玉鬘が六条院春の町で行った。若菜上巻の「明石若宮産養（七夜）」は、東宮主催である。鈴虫巻の「持仏開眼供養」は、女三の宮主催である。源氏の亡き後、蜻蛉巻で源氏・紫の上のための「法華八講」が行われた。この法要の主催者は、明石中宮である。春の町で行われた儀式の入口は、当然春の町なのであるが、藤裏葉巻の「冷泉帝の行幸」のみ、馬場殿がある夏の町となっている。このように、春の町で行われた

六条院における儀式

	巻	儀式	会場	主催	入口	備考
1	初音	正月臨時客	春の町	源氏	春の町	正月二日。前日は明石御方に泊る
2	初音	男踏歌のもてなし	春の町	源氏	春の町	玉鬘と紫の上の対面
3	胡蝶	中宮の御読経	秋の町	秋好中宮	春の町	前日に舟遊びあり
4	蜩	競射	夏の町 馬場殿	夕霧	夏の町	夕霧は左近衛府の中將
5	行幸	玉鬘の裳着	夏の町 西の対	源氏	夏の町	実父が腰紐役
6	真木柱	玉鬘の三日夜の儀	夏の町 西の対	源氏	夏の町	鬘黒大將との婚禮
7	梅枝	明石姫君の裳着	秋の町	源氏	春の町	前日より薫物合・管弦の遊び
8	藤裏葉	明石姫君の入内	春の町	源氏	春の町	桐壺に入る
9	藤裏葉	冷泉帝の行幸	夏の町 馬場殿 春の町 寝殿	源氏	夏の町	馬場殿より入り、秋の町の紅葉を見た
10	若菜上	源氏四十の賀	春の町	玉鬘	春の町	女三の宮降嫁と同じ場所
11	若菜上	女三の宮降嫁	春の町	源氏	春の町	寝殿の西側に入った
12	若菜上	源氏四十の賀	秋の町 寝殿	秋好中宮	—	入口の記述なし
13	若菜上	源氏四十の賀	夏の町	夕霧(冷泉帝)	夏の町	帝の勅命にて夕霧が行う
14	若菜上	明石若宮産養(三・五夜)	冬の町 中の対	源氏	冬の町	春の町へ渡ろうとする
15	若菜上	明石若宮産養(七夜)	春の町	東宮	春の町	朝廷主催
16	若菜上	蹴鞠	夏の町	夕霧	夏の町	春の町へと移動する
17	若菜下	競射	—	源氏	—	馬場殿を使ったか
18	若菜下	女楽	春の町 寝殿	源氏	春の町	朱雀院御賀の練習
19	若菜下	朱雀院御賀の試楽	夏の町	夕霧	夏の町	朱雀院御賀の練習
20	柏木	薫の産養	春の町	源氏	春の町	七夜は、朝廷主催
21	柏木	薫の五十日	春の町	源氏	春の町	3月。餅を食べさせる
22	鈴虫	持仏開眼供養	春の町	女三の宮	春の町	仏具は源氏が用意したもの
23	早蕨	六の君裳着	夏の町	夕霧	夏の町	六の君は落葉の宮の養女となる
24	宿木	三日夜の儀	夏の町 寝殿	夕霧	夏の町	匂宮と六の君の婚禮
25	宿木	昇進の饗宴	夏の町	夕霧	夏の町	薫と匂宮招かれる
26	蜻蛉	法華八講	春の町	明石中宮	春の町	源氏・紫の上のための法要

儀式の主催者は源氏が多く、源氏亡き後は明石中宮が主催者である。

夏の町で行われた儀式のうち、夕霧主催のものは七例である。蚩卷「競射」、若菜上巻「源氏四十の賀」（冷泉帝の勅命に抛る）、若菜上巻「蹴鞠」、若菜下巻「朱雀院御賀の試菜」、早蕨巻「六の君装着」、宿木巻の匂宮と六の君の「三日夜の儀」、宿木巻「昇進の饗宴」である。源氏が主催した夏の町での儀式は、藤裏葉巻の「冷泉帝の行幸」を含む三例である。行幸巻「玉鬘の装着」、真木柱巻「玉鬘の三日夜の儀」の玉鬘に関するものと、馬場殿での儀式「冷泉帝の行幸」である。若菜下巻の「競射」については、場所の明記がないので不明であるが、弓を射る催しであるため馬場殿を使用したのではないかと思われる。源氏が夏の町の寝殿で儀式を行ったとは語られていない。夏の町での源氏主催の儀式は、玉鬘の住む西の対で行った儀式と、馬場殿を使用する儀式である。

秋の町で行われた儀式は、三例が描かれる。胡蝶巻「中宮の御読経」、梅枝巻「明石姫君の装着」、若菜上巻「源氏四十の賀」である。秋の町の儀式について詳細は後述する。「源氏四十の賀」の入口については語られていないが、「中宮の御読経」「明石姫君の装着」の二例とも、入口は春の町となっている。

冬の町で行われた儀式は、「明石若宮産養（三・五夜）」の一例のみである。主催は、若宮の祖父にあたる源氏である。

以上、概観してみると、次のことが言えよう。源氏が主に儀式の

会場とするのは春の町である。源氏が夏の町を会場とする場合は、玉鬘に関する儀式と馬場殿を使用した儀式である。夕霧は夏の町で儀式を行う。秋の町で行われる儀式の場合の三例のうち二例は、春の町が入口となっている。残りの一例は、若菜上巻の「源氏四十の賀」であるが、入口の記述がないため不明である。冬の町で行われた儀式は、「明石若宮産養（三・五夜）」の例のみが語られる。六条院における儀式には以上のような傾向がある。

本稿では、秋の町で行われた儀式と、夏の町で行われた儀式について見ていく。

二、秋の町会場の儀式について

六条院で行われた儀式のうち、秋好中宮が住む秋の町を会場にしたものは三例である。胡蝶巻の「中宮の御読経」と、梅枝巻の「明石姫君の装着」と、若菜上巻の秋好中宮主催の「源氏四十の賀」である。秋の町は、六条御息所が住んでいた邸であり、秋好中宮を養女に迎えることによって、この邸に加えて造営したのが六条院である。

二―一、胡蝶巻の「中宮の御読経」

胡蝶巻の「中宮の御読経」について見る。参列者は、秋の町で行われる「中宮の御読経」の会場にどこから入ったのであろうか。

〈本文一〉

今日は、中宮の御読経のはじめなりけり。やがてまかでたまはで、休み所とりつつ、日の御装ひにかへたまふ人々も多かり。障りあるはまかでなどもしたまふ。午の刻はかりに、みなあなたに参りたまふ。殿上人なども残るなく参る。多くは大臣の御勢にもてなされたまひて、やむごとなくいつくしき御ありさまなり。

(胡蝶・③一七二)⁶⁾

「あなた」という語がある。「中宮の御読経」が行われる前日から、春の町では舟遊びと管絃の遊びが行われており、参列者は、春の町から移動していることが分かる。秋の町に直接入っていないのである。

〈本文二〉

夜に入りぬれば、いと飽かぬ心地して、御前の庭に篝火ともして、御階のもとに苔の上に、楽人召して、上達部、親王たちも、みなおのおの弾物、吹物とりどりにしたまふ。(中略)夜もすがら遊び明かしたまふ。

(胡蝶・③一六八)

春の町で行われた管絃の遊びは一晚中続いた。前日からの催しに参加して、帰宅することなく服装を変えて参列する者、用事などがあって一旦帰宅する者があった。正午ごろ、会場へと参入するのである。つまり、「中宮の御読経」に参加する者は、春の町の遊びに興じてから秋の町へ入っているのである。

二二、梅枝巻の「明石姫君の裳着」

梅枝巻において、源氏の一人娘、「明石姫君の裳着」が行われた。源氏は、秋好中宮に腰結役を依頼し、中宮の居所である六条院秋の町を裳着の会場とした。源氏と紫の上、明石の姫君が春の町から秋の町へと赴いた。

〈本文三〉

かくて、西の殿に戌の刻に渡りたまふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髪上の内侍なども、やがてこなたに参れり。上も、このついでに、中宮に御対面あり。

(梅枝・③四二一、四二二)

この裳着が行われる前の源氏らの動きを押さえておきたい。六条院春の町に、蛭兵部卿宮が訪れる。

〈本文四〉

二月の十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿宮渡りたまへり。御いそぎの今日明日ににけることとぶらひ聞こえたまふ。

(梅枝・③四〇五)

蛭兵部卿宮が訪れたのは、裳着の「今日明日ににける」頃であった。このあと、蛭兵部卿宮は、「言ひ知らぬ匂ひどもの進み、後れたる、香一種などが、いささかの咎をわきて、あながちに劣りまさりのけぢめをおきたまふ。」(梅枝・③四〇八)と、薫物の判定

を行い、「月さし出でぬれば、大御酒などまゐりて、昔の御物語などしたまふ。」(梅枝・③四一〇)と、酒宴を催し、「まことに明け方になりてぞ、宮帰りたまふ。」(梅枝・③四一二)とあり、明け方に帰って行くので、正確には、前日に訪れ当日の朝帰って行ったことになろう。この蛭兵部卿宮との酒宴の間、ほかの客人も多く訪れている。

〈本文五〉

藏人所の方にも、明日の御遊びのうち馴らしに、御琴どもの装束などして、殿上人などあまた参りて、をかしき笛の音ども聞こゆ。内の大殿の頭中将、弁少将なども、見参ばかりにてまかづるをとどめさせたまひて、御琴ども召す。宮の御前に琵琶、大臣に箏の御琴まゐりて、頭中将和琴賜はりて、はなやかに掻きたてたるほど、いとおもしろく聞こゆ。宰相中将横笛吹きたまふ。をりにあひたる調子、雲居とはるばかりふきたてたり。弁少将拍子とりて、梅が枝出だしたるほど、いとをかし。童にて、韻塞のをり、高砂うたひし君なり。宮も大臣もさしいらへしたまひて、ことごとしからぬものから、をかしき夜の御遊びなり。

(梅枝・③四一〇～四一一)

殿上人が多く訪れ、管絃の宴となった。「明日の御遊びのうち馴らし」とあることから、明日の儀式に管絃の宴を催すのであろう。内大臣家の柏木らは当初、「見参ばかりにてまかづるを」とあり、

藏人所に記帳だけして帰ろうとしたのを引きとめている。柏木は和琴を演奏し、夕霧は横笛を演奏している。源氏の居る春の町の藏人所が受付の用をなして、こちらから客人が訪れていたように見える。明け方に蛭兵部卿宮が帰り、「次々の君たちにも、ことごとしからぬさまに、細長、小桂などかづけたまふ。」(梅枝・③四一二)と、柏木などが帰って行くさまが語られる。「明石姫君の装着」の前日、楽の練習が春の町で行われた。源氏、紫の上、明石姫君が戌の刻(午後八時ごろ)に会場である秋の町に赴いたが、楽の演奏は、春の町で行われた可能性があるのではないか。本番と同じ場で練習を行うことはあり得る。装着の前日から多くの殿上人が訪れていたが、前日と同様、春の町の藏人所から会場入りしたのではないかと考えられる。

その中で、御髪上の内侍は、直接秋の町に入ったと解釈されている。(本文三)に「御髪上の内侍なども、やがてこなたに参れり。」とあり、この箇所解釈について、『新編日本古典文学全集』では、「南の殿などに寄らずに、直接式場である西の殿に参上する」という注を付している。現代の諸注および現代語訳は、以下のとおりである。

- ① 『源氏物語評釈』「まっすぐこちらに参集した」
- ② 『日本古典文学全集』「まっすぐこちらに参上した」
- ③ 『新潮日本古典集成』「中宮に従って西の放出に参上した」
- ④ 『新日本古典文学大系』「宮中から直接六条院の西の御殿に」

⑤ 『新編日本古典文学全集』「まっすぐこちらに参上している」

⑥ 『国文学「解釈と鑑賞」別冊』「そのままこちらに参上した」

①・②・⑤は、「まっすぐこちらに」と解釈しているため、秋の町に直接に入ったことを示しており、③は、中宮に従って入ったとされている。④は、宮中からやって来て、秋の町に入ったとしている。

⑥は、「そのままこちらに」とある。御髪上の内侍が、春の町か秋の町のどちらから入ったのかを明らかにしたいのだが、諸注および現代語訳から見ると、御髪上の内侍も春の町で楽の演奏を見物し、時刻になって秋の町（「こなた」）へ参上したとも捉えられ、一方、儀式に関わる役を担う人なので、秋の町から直接入ったとも捉えられる。御髪上の内侍がどちらの町から入ったかについては決したい。

このように、御髪上の内侍の入口については不明としか言いようがないが、そのほかの「明石姫君の裳着」に参加する客人は、春の町から入っていると言える。裳着は、秋好中宮の邸である秋の町が会場であるが、春の町が入口であったのである。

二一三、若菜上巻の「源氏四十の賀」

六条院で催された「源氏四十の賀」は、玉鬘・秋好中宮・夕霧（冷泉帝の勅命に拠る）主催の三回行われた。そのうち、秋好中宮主催の「源氏四十の賀」は、秋の町で行われたものである。

〈本文六〉

宮のおはします町の寝殿に御しつらひなどして、さきさきにごとに変わらず、上達部の祿など、大饗になずらへて、親王たちにはことに女の装束、非参議の四位、廷臣たちなどただの殿上人には、白き細長一襲、腰差などまで次々に賜ふ。装束限りなぐきよらを尽くして、名高き帯、御佩刀など、故前坊の御方さまにて伝はりまゐりたるも、またあはれになむ。

（若菜上・④九八）

秋好中宮の居所である秋の町で行われたことが記されるが、そのほかの記事はなく、参列者がどこから入ったのかは不明である。この中宮主催の賀宴の前に、紫の上の二条院での「源氏四十の賀」があったため省略されたのだろう。紫の上主催の賀宴は、舞と楽の演奏が語られている。秋の町で行われた中宮主催の賀宴の場合、「中宮の御読経」「明石姫君の裳着」と同様に春の町を入口とした、連携した会場設営だった可能性があろう。

二一四、六条院における秋の町

以上、秋の町を会場にした儀式三例について見てみた。若菜上巻の「源氏四十の賀」については詳しく描かれていないため参列者の入口が不明であるが、「中宮の御読経」と「明石姫君の裳着」に関しては、春の町との連携によって行われていることが分かった。人々

は、春の町での催しに興じたのち、秋の町へと入っていくのである。では、源氏が六条院を造営する前、六条御息所に源氏が通っていた頃の六条の古宮はどのようであったろうか。

〈本文七〉

御心ざしの所には、木立前栽など、なべての所に似ず、いとどかに心にくく住みなしたまへり。
(夕顔・①一四二)

〈本文八〉

前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。
(夕顔・①一四七)

〈本文九〉

なほ、かの六条の古宮をいとよく修理しつくるひたりければ、みやびやかに住みたまひけり。
(落標・②三〇九)

六条御息所の住まいの描写は、木立や前栽のありさまであり、賑やかな邸ではない。そして、六条院造営後のこの町もまた賑やかな町ではないことが、玉鬘を迎えた時の源氏の心情から見える。

〈本文十〉

住みたまふべき御方御覧するに、南の町は、いたづらなる対どもなどどもなし、勢ひことに住みみちたまへれば、顕証に人しげくもあるべし。中宮のおはします町は、かやうの人も住みぬべくのだやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなされむと思して、すこし埋れたれど、丑寅の町の西の対、文殿にてある

を他方へ移してと思す。

(玉鬘・③一二五)

玉鬘をどこに住まわせるか思案している源氏は、夏の町の西の対に住まわせようとする。春の町には空いている建物もなく人が多くいて、目立つ。それに比べ秋の町は、静かで穏やかではあるが、中宮に仕える女房と同列に思われるだろうと心配する。この玉鬘への源氏の心配から、春の町と秋の町の違いが見える。春の町は人が多く活気づいており、秋の町は静かで穏やかである。このため、秋の町が大路に面していないと想定するのは、間違いないと言えよう。「明石若宮産養(七夜)」は、産所であった冬の町で行わず、春の町に移って行われた。その理由について、冬の町が「隠れの方」(若菜上・④一〇八)だからだと語られる。大路に面していたと考えられる春の町に比べ、小路に面した冬の町は裏側に当たり、客人を招くには不都合だったのが理由の一つだと考えられる。秋の町も同様に、春の町に比べ穏やかでゆったりとした町であった。秋の町で行われた「中宮の御読経」や「明石姫君の裳着」の入口は、大路に面した春の町であった。春の町と連携した儀式会場となっていたのである。

三、夏の町会場の儀式について

次に、夏の町で行われた儀式について見ていきたい。夏の町での儀式には、二つの特徴が見られる。夕霧主催の場合と、馬場殿を使

用した場合とあるということである。

源氏が主催した儀式のうち、夏の町を会場にしたのは、夏の町の西の対に住む玉鬘の関連儀式が挙げられる。「玉鬘の装着」（行幸・③三二六〜三一九）、「玉鬘の三日夜の儀」（真木柱・③三五〇〜三五一）である。そのほかは、馬場殿を使用する儀式である。「冷泉帝の行幸」（藤裏葉・③四五八〜四六三）が該当する。源氏は、玉鬘に関連する儀式以外、夏の町の寝殿などでの儀式を行っておらず、馬場殿を使用した儀式のみ主催すると言えよう。若菜上巻の「競射」（④一五三〜一五四）については、場所の明記がないので不明であるが、弓を射る催しであるため馬場殿を使用したのではないかとと思われる。

一方、夕霧の主催する大きな儀式が「源氏四十の賀」である。これは、夕霧が表立って動いているが、冷泉帝の勅命に拠る儀式である。

〈本文十一〉

内裏には、思しそめてしことどもをむげにやはとて、中納言にぞつけさせたまひてける。そのころの右大将病して辞したまひけるを、この中納言に御賀のほどよろこび加へむと思しめて、にはかになさせたまひつ。院もよろこび聞こえさせたまふものから、源氏「いと、かく、にはかにあまるよろこびをなむ、いちはやき心地しはべる」と卑下し申したまふ。

丑寅の町に、御しつらひ設けたまひて、隠ろへたるやうになしたまへれど、今日は、なほかたことに儀式まさりて、所どころの饗なども、内蔵寮、穀倉院より仕うまつらせたまへり。屯食など、公さまにて、頭中将宣旨うけたまはりて、親王たち五人、左右の大臣、大納言二人、中納言三人、宰相五人、殿上人は、例の内裏、春宮、院、残る少なし。御座、御調度どもなどは、太政大臣くはしくうけたまはりて、仕うまつらせたまへり。今日は、仰せ言ありて、渡り参りたまへり。

（若菜上・④九八〜九九）

冷泉帝は、実父である源氏に孝養を尽くしたい思いがあって、賀宴を催すことを提案していたが、源氏に断られている経緯がある。そのため、夕霧に委託したのである。

〈本文十二〉

内裏にも、故宮のおはしまさぬことを、何ごとにもはえなくさうさうしく思さるるに、この院の御事だに、例の、跡あるさまのかしこまりを尽くしてもえ見せてまつらぬを、世とともに飽かぬ心地したまふも、今年はこの御賀にことつけて行幸などもあるべく思しおきてけれど、「世の中のわづらひならむこと、さらにせさせたまふまじくなむ」と辭び申したまふことたびたびになりぬれば、口惜しく思しとまりぬ。

（若菜上・④九六〜九七）

夕霧の養母が花散里であるため、夕霧は夏の町を使用することができる。花散里は、二条東院の西の対に住んでいた頃から、夕霧の後見を源氏から託されていた(少女・③六七)。反対に、紫の上が住む春の町を使用することはできない。それは、源氏の継母にあたる藤壺の宮に対するあやまちがあったからであり、同じことが息子に起こることを恐れ、夕霧を紫の上に近付けていないのである(蛩・③二一六)。

そのほか、蛩巻で夕霧が左近衛府の中將だった頃、宮中での競射が終わった後、左の衛府に仕える人たちを連れて来て、六条院の馬場で引き続き「競射」を行うことがあった(蛩・③二〇五～二〇七)。「夕霧が大将の頃、若い人々を連れて「蹴鞠」を夏の町で行った(若菜上・④一三七～一四三)。源氏の勧めにより、「蹴鞠」の場は春の町に移動し、柏木の女三の宮垣間見へとつながる。ほか、「朱雀院御賀」で披露する楽の練習を夏の町で行った(若菜下・④二七三～二八〇)。これは、内々の練習であり、本番は春の町で行う予定であった。花散里は練習を聞くことしかできない。これらの儀式が夏の町で行われた。

源氏の亡き後、春の町において行われた儀式が、明石中宮主催の「法華八講」である。

〈本文十三〉

蓮の花の盛りに、御八講せらる。六条院の御ため、紫の上な

どみな思し分けつつ、御経、仏など供養せさせたまひて、いかめしく尊くなんありける。五巻の日などは、いみじき見物なりければ、こなたかなた、女房につきつつ参りて、もの見る人多かりけり。(蜻蛉・⑥二四七)

夕霧は、夏の町に落葉の宮を住まわせ(「丑寅の町に、か的一条宮を渡したてまつりたまひて」(匂兵部卿・⑤二〇))、六の君を落葉の宮の養女とした(匂兵部卿・⑤三三)。匂宮と六の君の婚礼を夏の町で行った(宿木・⑤四〇)。このように、春の町では明石中宮主催の儀式が語られ、夕霧は、源氏亡き後も夏の町を拠点としているのである。

おわりに

以上、大路を意識した邸宅の構造について、六条院に関する記述から窺えるかどうかを考察した。秋の町を会場にした「中宮の御読経」、「明石姫君の裳着」の場合、春の町と連携して行われ、入口は春の町であった。夏の町を会場にした儀式は、夕霧が主催する場合が多く、源氏が使用する場合、玉鬘の住む西の対と馬場殿に限られている。春の町を会場にした儀式は、源氏が主催することが多い。冬の町での儀式は、やむを得ず行った「明石若宮産養(三・五夜)」のみである(若菜上・④一〇八～一〇九)。秋の町も入口として使用されているとは語られていない。儀式を行う入口に当たる町は、

春の町と夏の町であった。春の町（辰巳の町）と夏の町（丑寅の町）は晴側に当たると想定されており、六条院においても、大路を意識した邸宅の構造となっていることが分かった。

秋の町で行われた儀式、「中宮の御読経」と「明石姫君の装着」では、春の町から秋の町への建物内の客人の移動があった。つまり、秋の町に至る廊の位置を、奥側ではなく、表側に置く必要があると思われる（図参照）。そこで、この廊は、客人が通る際に美しく見えるように工夫されていたのだと考える。

六条院の晴は、大路上に面した側の春の町と夏の町と言え、当時の貴族邸宅の構造を反映したものとなっている。六条院四町は、それぞれ独立した一町の邸宅を構えながら、時に六条院全体で、その時々に応じた連携を見せることで、源氏や夕霧らが主催する儀式を支える。このように、六条院で行われる儀式の入口を考察していくことで、一町ごとの役割が鮮明になり、作者や当時の読者が共有した六条院像に一步近づいたのではないかと考える。

注

- (1) 玉上琢彌氏編、山本利達氏・石田稷二氏校訂『紫明抄・河海抄（第七版）』（角川書店、一九九一年）。
- (2) 故実叢書編集部編『故実叢書禁秘抄考註・拾芥抄』（明治図書出版、一九九三年）。
- (3) 玉上琢彌氏「光る源氏の六条院復元案・第二案」（『歴史文化研究』「源

氏物語」と平安京「おうふう、一九九四年）、池浩三氏「源氏物語の六条院―その想定平面図の根拠―」（同）。

(4) 川本重雄氏は、儀式に用いられる晴側と私生活に使用される寝の分化について述べられ、寝殿造邸宅が左右非対称であることを明らかにされた『寝殿造の空間と儀式』中央公論美術出版、二〇〇五年。この大炊御門東洞院殿については、川本氏より前に、太田静六氏『寝殿造の研究』（吉川弘文館、一九八七年）の言及があるが、晴と寝の分化についての指摘はない。

大炊御門東洞院殿の移建が決定したのは、『中右記』天永二年九月十二日条の以下の記事から確認される。「大炊殿造作之事被議定處、（中略）被造大炊殿可宜者、《本所被壊渡、與新所其東町共被宛吉方也、件造作偏殿下御沙汰也、仍所被避方角也》」（『増補史料大成 中右記』臨川書店、一九六五年）。

(5) 『増補史料大成 長秋記』（臨川書店、一九六五年）。

(6) 『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①⑥』（小学館、一九九四～一九九八年）により、巻名、頁数を示す。私に傍線を付し、振り仮名を省略した。発話及び和歌に付された傍注は、便宜上付したままとした。以下同じ。

(7) 『紫式部日記』に、「勸学院の衆とも、歩みしてまゐれる。見参の文、また啓す。」（小谷野純一氏『原文&現代語シリーズ紫式部日記』笠間書院、二〇〇七年、五〇頁）とある。

(8) 『小右記』に記されている、土御門殿で行われた彰子の装着を例に掲げる（『大日本古記録 小右記六』岩波書店、一九七一年）。

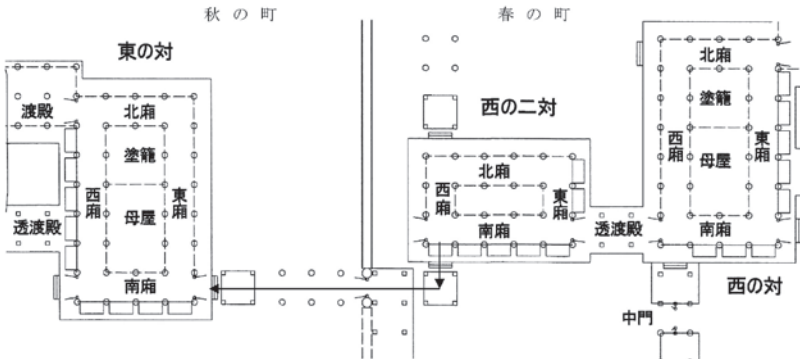
長保元年（九九九）二月九日（玉鑿）建暦元年三月条による（申刻許右大臣・内大臣已下諸卿来左府亭、其座在寝殿西又廂及渡殿、主客居膳之後、盃酒教巡《殿上四位并公卿上勸》、有竹肉興《先大夫等

置管絃具、次堪能人々調之、地下楽人等応召候階下、《給衝重、有勸盃》、次居衝重、酒盃両巡、《大納言勸之、主人同勸之》、更歌吹不止、此間供着装前物、陪膳人経渡殿、自寝殿西面《初着上達部座傍》、進之、次く公卿献和歌於左大臣、々々和之、(後略)

彰子の装着会場は、土御門殿(上東門院)である。参列者には酒がふるまわれ、楽の演奏が行われる。彰子の場合、右大臣・内大臣らの座は、寝殿の西又廂及び渡殿にあった。食膳を給仕する人が、渡殿を経、寝殿の西面に移動していることから、彰子の装着の会場は、寝殿の西面であつたらうか。

- (9) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈六』(角川書店、一九六六年)。
- (10) 阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『日本古典文学全集 源氏物語②』(小学館、一九七二年)。
- (11) 石田穰二氏・清水好子氏校注『新潮日本古典集成 源氏物語四』(新潮社、一九七八年)。
- (12) 柳井滋氏・室伏信助氏ほか校注『新日本古典文学大系 源氏物語三』(岩波書店、一九九五年)。
- (13) 阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語③』(小学館、一九九六年)。
- (14) 河添房江氏編『国文学解釈と鑑賞別冊 梅枝・藤裏葉』(至文堂、二〇〇三年)。

—— かつう・のぶえ、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学 ——



〔図〕 六条院想定配置図私案
(春の町から秋の町へ移動する客の経路を←で示す。)